

小田原市民歌

小田原市は昭和二三年四月一日、下府中村を合併したところから将来の発展をめざして前向きな歩みを踏み出したと見てよいと思うが、その翌年、鈴木十郎氏が市長になってからこの動きは積極性を加え、かつ意欲的になった。そして、市民は昭和二五年、市制施行一〇周年の記念すべき年を迎えた。

ふりかえってみると、大まかにいって昭和一五年から昭和二四年までは、戦中戦後の困難と戦いながら市の基礎づくり而努力してきた期間であり、昭和二五年以降は近代都市へ向かって躍進する時期ということになる。してみると、昭和二五年は単に一〇周年としてだけでなく、小田原市にとって大きな転換をはじめた記憶すべき年といつてよいのである。事実、市民の意気はきわめてさかんで、郷土の発展を願う気持はほうはいとして興ってきた。

「小田原市民歌」(歌詞No.17)はこのような背景の中から、生れるべくして生れたといつてよいであろう。したがって歌詞については当然公募という形がとられた。これに対して応募作品は市内はもとより県内、県外におよび、その総数二百数十編にのぼった。

審査は御幸の浜の滄浪閣で、北条秀司、福田正夫、井上康文の三氏によって慎重に行われた。そして、相洋高等学校教諭岩越昌三氏の作品が市民歌として選ばれた。

この歌詞に、小田原市の出身で、当時武蔵野音楽大学助教授、東京芸術大学講師であった石黒脩三氏の曲がつけられ、一二月二〇日の市制施行十周年祝賀式で発表されたのだった。